

一刀入魂の

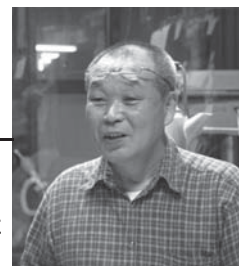
響きあり

能楽の一噌流^{いっそうりゅう}笛方・一噌幸弘^{いっそうゆきひろ}氏や佐渡の「鼓童」をはじめ、一流の演奏家たちが日本全国から蘭情さんの作る笛を求め、この工房にやって来る。一方で、小学生や近隣の愛好家たちに笛を教える、草の根活動も続けている。



工房での蘭情氏

子どもの頃見た祭り



□プロフィール

蘭情(本名:長谷川照昭)61歳
昭和22年山武市上横地生まれ
現在 島(成東地区)に在住
横笛製作者として、音楽性も
好みも違う一流演奏家の注文に応え続ける。一方、大正時代に途絶えた九十九里地方に広く伝わる「上総獅子頭」を自らの研究と工夫により復活させ、昭和61年、千葉県指定伝統的工芸品に選定されている。

昭和49年、当時26歳の蘭情さんは、成東高校卒業後、横浜でサラリーマンをしていたが、寺田(上横地)にある実家を継ぐため帰郷。ちょうどその年、途絶えていた地元祭りの祭りが復活し、蘭情さんの祭り熱も再発した。お囃子^{はやし}の仲間に入り、自分の吹く笛を作った。その頃はまだ竹を取ってくるなど思いもつかない。落ち葉掃きに使う熊手を買って来ては柄を切って笛を作った。

「小さい頃、近所の親父さんの吹いた笛の音の印象は、この世のものとは思えない強烈なものでした」

手先が器用だった蘭情さんは、小学校3・4年生の頃から見よう見真似

で笛を作った。しかし興味を持ってはいたものの、自分の身を立てることになろうとは予想もしていなかった。初めはバイトをしながら笛を作っていたが、29歳、笛1本で身を立てようと本格的な製作活動に入った。「その頃は、友だちが作ってみたいかと持ってきた能や雅楽に使う笛を、人間だから出来ないわけないと、見たとおりに同じように作っていたので、今みたいに深いところまで分かっていたんですね。自分が絶対いいと思って納めたものが評価されず、何十回と嫌な思いをしました。これは、相当の根気と執念がなければできない仕事。外形は真似できても律が取れない。プロの演奏家と付き合うようになってからです、奥の深さに気付いたのは」

趣味は仕事と言いつ切る

ガラス戸を背にあぐらを組んで座る蘭情さんの前には、丸い石油ストーブ。朝7時前から夕方6時過ぎまで、正月数時間の休み以外365日笛作りに専念し、月に140本、年間で1500本以上の笛を作成。食事は10分で済ませ、「責任を持たないと駄目。まあ、休んじやうと調子が狂っちゃうんだよね」と話す脇の棚には常に追いつかない注文票が貼られ、周りには、灰皿が置かれている。そして、これから100年間もつ笛になる竹が、蘭情